心内語練習問題（解答例）

○『更級日記』（あこがれ）

夢に、「いと清げなる僧の、黄なる地の袈裟着たるが来て、「法華経五の巻を疾く習へ。」と言ふ」と見れど、人にも語らず、習はむとも思ひかけず、物語のことをのみ心に占めて、「我はこのごろわろきぞかし。盛りにならば、容貌も限りなくよく、髪もいみじく長くなりなむ。光の源氏の夕顔、宇治の大将の浮舟の女君のやうにこそあらめ。」と思ひける心、まづいとはかなくあさまし。

○『源氏物語』（物の怪出現）

「あな心憂や。げに身を棄ててや往にけむ。」と、うつし心ならずおぼえ給ふ折々もあれば、「さならぬことだに、人の御ためには、よさまのことをしも言ひ出でぬ世なれば、ましてこれはいとよう言ひなしつべきたよりなり。」と思すに、いと名立たしう、「ひたすら世に亡くなりてのちに恨み残すは世の常のことなり。それだに人の上にては、罪深うゆゆしきを、うつつのわが身ながらさる疎ましきことを言ひつけらるる、宿世の憂きこと。すべてつれなき人にいかで心もかけ聞こえじ。」と思し返せど、「思ふもものを」なり。

○『源氏物語』（女三宮の降嫁）

（紫の上ガ）御衣どもなど、いよいよたきしめさせ給ふものから、うちながめてものし給ふ気色、いみじくらうたげにをかし。「などて、よろづのことありとも、また人をば並べて見るべきぞ。あだあだしく心弱くなりおきにけるわが怠りに、かかることも出で来るぞかし。若けれど中納言をばえ思しかけずなりぬめりしを。」と（源氏ハ）我ながらつらく思しつづけらるるに、涙ぐまれて、

○『源氏物語』（女三宮の降嫁）　＊一部本文改変

「年ごろ、『さもやあらむ。』と思ひしことどもも、『今は。』とのみもて離れ給ひつつ、『さらばかくにこそは。』とうちとけゆく末に、ありありて、かく世の聞き耳もなのめならぬことの出で来ぬるよ。思ひ定むべき世のありさまにもあらざりけり。」と今よりのちもうしろめたくぞ思しなりぬる。